426

踊場遺跡（おどりば）

（曽於郡財部町南俣字踊場）

位置と環境

遺跡は，財部市街地から南西方向に約6.3㎞の位置に所在し，炭山谷川と今別府川の間に挟まれた標高約300ｍの東北方向に延びる台地の南縁辺部段丘上に立地する。遺跡のすぐ北側には，標高321ｍの小丘陵がひかえており，その小丘陵を挟んだ反対側には，古代の蔵骨器が出土した財部城ヶ尾遺跡が所在する。

調査の経緯

遺跡は，日本道路公団の委託により，東九州自動車道（国分 IC～末吉 IC 間）の建設に伴って県教育委員会が平成６年（1994）10月と平成７年５月の分布調査により遺跡存在の可能性が把握された。

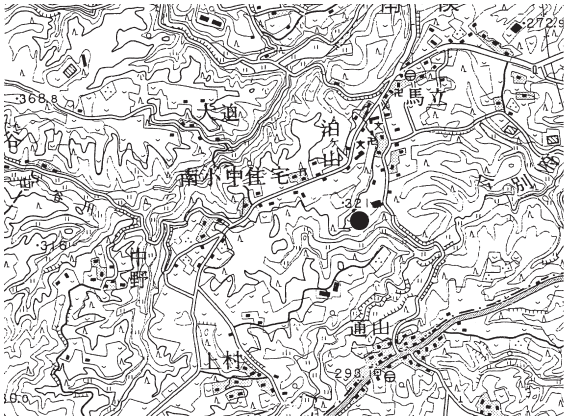
その後，平成12年には確認調査実施後本調査を行った。調査面積は4,390㎡である。

遺構と遺物

調査の結果，縄文時代（早期，中期，晩期），古代，中世の遺物・遺構等が発見された。

縄文時代早期では，塞ノ神Ａ式土器，手向山式土器，磨石，石皿等の遺物が出土し，集石が４基検出された。塞ノ神Ａ式土器は１個体が潰れ，傾斜に沿って流れたような状態で出土し，ほぼ完形に復元できた。

縄文時代中期では，阿高式土器の破片が少量出土したが，遺構は検出されなかった。

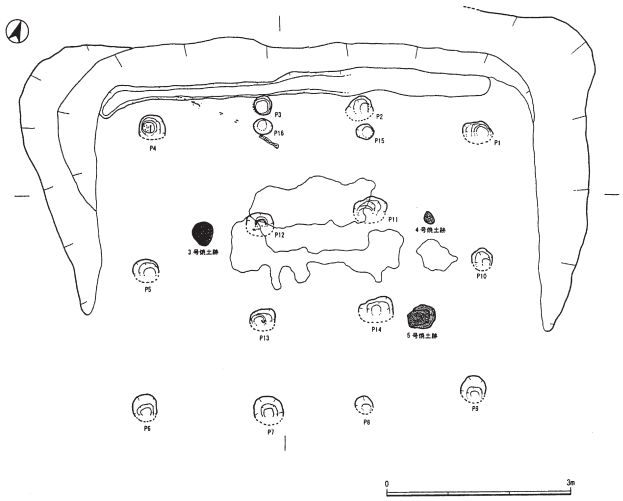


第１図　踊場遺跡の位置

縄文時代晩期では，黒川式土器，石鏃，磨石，石皿，石錐，磨製・打製石斧，小型の勾玉等が出土した。また，一部に黒曜石・チャートのフレーク，チップが集中して出土する箇所があり，石器製作を行っていた可能性をうかがうことができる。同時期の遺構としては，用途不明の土坑が５基検出された。

古代（平安時代）では，土師器，須恵器，内黒土師器等の破片が多量に出土した。一部には墨書の見られるものも確認されている。また，近辺の同時期の遺跡から出土する焼塩土器の破片も多く出土した。ほかには須恵器片を転用した転用硯，紡錘車，鉄製品片，銅製品片等が出土した。

遺構は，掘立柱建物跡９棟，焼土跡，古道跡，軽石集積遺構１基，礫集積遺構２基，ピット多数等を検出し，このほかに斜面を削平し平坦面をつくり出して建てられた掘立柱建物跡（第２図）が検出された。



第２図　掘立柱建物跡

写真１　掘削面及び灰集積状況

中でも，平坦面をつくり出して建てられた掘立柱建物跡は，特殊な遺構であり詳細を紹介したい。平坦面は，丘陵南側斜面を東西約7.5m，南北約6.5mを切土してつくり出されている。平坦面奥には浅い溝状の落ち込みがあり，背後丘陵からの雨水よけではないかと思われる。

平坦面には３か所の焼土跡が確認され，中央部には薄く灰が集積している部分が見られた（写真１）。

掘立柱建物跡は柱跡（ピット）が，外側に２間×３間，内側北よりに２間×１間という配列で検出された。一部のピットには炭化物が残存するものがあり，平坦面にも横転した状態の炭化木がみられ，柱材である可能性も考えられる。

また，該当部分とその周辺からは体部に縦位の彩色を施し，肩部に３か所の穿孔を施した土師器の小型壺（写真２），脚台付きの土師埦，坏，墨書土器などが完形に近い状態で出土した。遺構の時期は，共伴する遺物から９世紀終末～10世紀初頭頃が考えられる。

中世では，文明ボラ（1471年頃の桜島噴出物）でパックされた畝跡（第３図）が遺跡のほぼ全域から検出された。畝跡は，東西方向に延びており，それと直行する落ち込みも確認でき畠境と推測される。一部が削平されているため正確な畠１枚の面積等の確認には至らなかったが，現状で確認できる範囲で３枚の畠であることが推測できる。

特徴

当遺跡で特筆すべきは，平坦面をつくり出して建てられた掘立柱建物跡であろう。出土する遺物やピット配列の特殊性，遺構の立地などから，日常生活と異なる空間，例えば祭祀等に係わる遺構，寺社などである可能性が考えられる。類例が少ないだけに注目に値する。

資料の所在

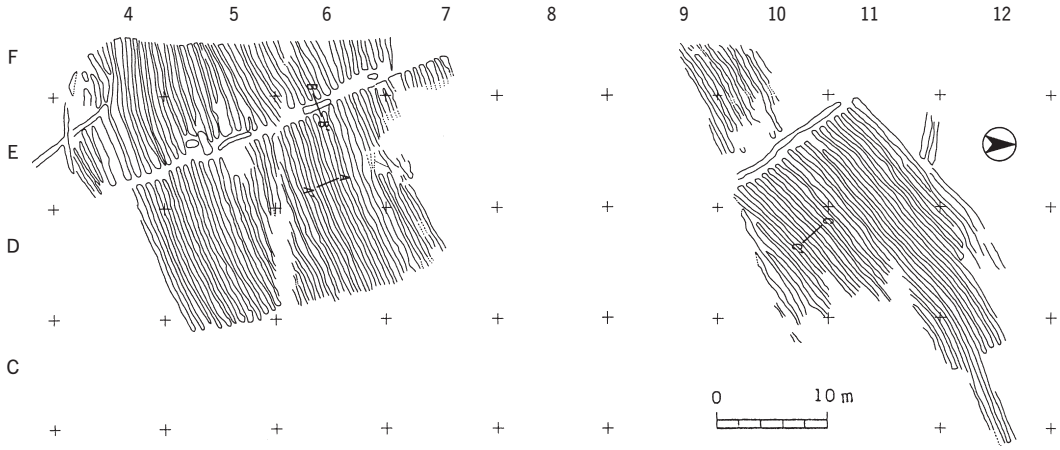
出土遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター2004「踊場遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』71

（有馬孝一）

写真２　小型壺出土状況



第３図　Ⅲ層上面　中世　畝状遺構検出状況